杵築郷土史研究会の活動

久米忠臣

杵築史談会が発展的に解消され、新しく杵築郷土史研究会として発足したのは昭和四十五年である。巾広い活動と共に会員も百三拾名と増え、機関誌も「杵築史談」から「郷土史杵築」と名称を変え、すでに二十八号を発刊している。六十ページぐらいのこの本は役員の手作りで、印刷・製本を行い、年間五冊を目標にし、別に会報は毎月一回西洋紙大のものを出している。別に臨時号として「種子集」「杵築郷土私考」「追遠拾遺」「杵築藩書画人名鑑」「日出藩十帳」「市町村別大分県文化財集」「閑居口號」など数多くのものを出版している。特に本年は、杵築に残る貴重な資料である「町役所日記」の解説本全十巻の発刊に取り組んでいる。この「町役所日記」は元禄より明治までの町人の生活実態をあますところなく書いた百三冊の原本を、誰にも読めるように、当会員の太田利夫先生が書いたものである。多額の資金を必要とする大事業であるが、四月には第一巻を千八百円で刊行する。題名は「杵築藩町人の生活」である。

毎月二回の例会は講演会・講習会・実地見学などを組みあわせ、六十名内外の会員が参加し、年一回はバスによる見学旅行も行っている。会費は年間千五百円で、市補助金は一万円、役員の奉仕で運営されている。市外の会員も増え、会誌を送っているが郵便料の値上げに頭を痛めている。

杵築は城下町の面影を最もとどめているところと言われるが、古いものが急速に失われようとしている。市立図書館もなく、古文書も放置されており、文化財の保存・保護が急務であるが。当研究会も文化財愛護に積極的に取り組んでいる。

杵築市友清

（杵築郷土史研究会事務局長）